芥川詩集

芳水詩集

有本芳水作

芳水詩集

有本芳水作

沈尹默詩集

1914

少年少女詩集

芳水詩集

著者
有本芳水

裝幀
竹久夢二

東京
日本之業實社
京橋區南紺屋町十二番地
1914

BY Y. TAKEHISA

序

少年、少女の愛らしき口より、われに詩集を編めとの請めいなみがたくて、茲にわが幼き詩集『芳水詩集』はなりぬ。

この少さき一卷の詩集に集められたる詩の多くはかつて『日本少年』に發表したるものの

みなり。然らざるものは多く舊作にかかる。

裝幀はともに旅を好み、ともに少年時代をなつかしき岡山に送りし友、竹久夢二君の手に

なるものなり。

詩集を編めばとて、敢へて詩壇に問ふとの心にはあらず、ただにすぎ去りし少年の日の記念とし、かつはそのかみの思ひ出をしのぶよすがせば足らんのみ。

この詩集をよまれたる人達よ！　卿はこの集の中に、巡禮と、赤き灯と、脚胖と、すげ笠なる文字の餘りに多きに驚き給ふらむ。また旅といふ文字の餘りに多きに眉をやひそめたまふらむ。

しかれどもわれは旅人なり、つねに旅を好んで止まざるなり。花散る日南國の並木路に巡禮の歌をききて泣き、月出づるとき、北國の港に船唄の聲を聞きて佇みしこと幾度、あるはるけき海路の磯づたひにすげ笠をいただき、または西國の旅籠に草枕ねむりもあえず脚胖の紐をひきむすび、さてはみちのくの夜泊に赤き灯かげをなつかしみし身なれば。

旅にしあれはしみじみと
赤き灯かげに泣かれぬる。

されば人生は旅なり、ああわれは旅人なり、さらばいつまでもかく歌ひつづけむ。

月夜船唄をききつつ
筑前博多の客舍にて
二月十七日　著者

芳水詩集　目次

旅より旅へ

粉河寺……（二）
琵琶のみづうみ……（七）
淺間山……（一三）
淡路島……（一七）
鈴鹿峠……（二三）

奈良より……（二八）
京の春……（三三）
熊野浦……（三八）
淺草……（四三）
甲斐より……（四八）
伊勢より……（五三）
木曾より……（五八）
播磨灘……（六三）
日本橋……（六八）
法隆寺……（七三）

紀伊の國……（七八）
道頓堀……（八三）
大和めぐり……（九一）

思ひ出

倉……（一〇〇）
たそがれ頃……（一〇一）
鉞醫……（一〇三）
粉雪……（一〇四）
かくれんぼ……（一〇五）

行燈……（一〇七）
船男……（一〇八）
春は行く……（一〇九）
柩……（一一〇）
祭の夜……（一一三）
芝居ごつこ……（一一五）
隣の家……（一一八）
無花果……（一一九）
春の夜……（一二〇）
異人さん……（一二三）

父の死……（一二五）
柳の花粉……（一二七）
朱欒……（一二八）
ヂギタリス……（一三〇）
紫に暮れぬる夕……（一三一）
枕べ……（一三五）
トランプ……（一三七）
姉……（一三八）
祖母……（一四〇）
甕……（一四一）

のぞき眼鏡……（一四三）
螢……（一四五）
鶏頭花……（一四七）
繪草紙……（一四八）
飴屋の笛……（一五〇）
赤い椿……（一五一）
たんぽぽ……（一五三）
青き鳥……（一五四）
傘……（一五六）
花火……（一五七）

花散る日……（一五九）
銀時計……（一六〇）

漂泊

浪……（一六四）
海……（一六五）
顔……（一六六）
深夜……（一六八）
海路……（一七〇）
月光と少年と……（一七三）

港の町……（一七五）
波……（一七七）
ダリアの花……（一七八）
落葉林……（一八〇）
浮瑠璃……（一八一）
森……（一八四）
潮のひびき……（一八六）
日ぐれの町……（一九〇）
寂顔……（一九四）
青ざめたる空……（一九六）

白壁……（一九八）
波のつれびき……（一九九）
月光を浴びつつ……（二〇〇）
月光と音樂……（二〇一）
吉備の一夜……（二〇三）
冬の午後……（二〇四）
日本橋の畫……（二〇六）
壁畫……（二〇七）
夜の室……（二〇八）
隣室……（二一二）

花やかなる瓦斯の下……（二二四）
かはたれ……（二二五）
そぞろごと……（二二六）
薔薇……（二二七）
病院……（二二八）
門づけ……（二二九）
棕梠の花……（二三〇）
きりぎりす……（二三一）
岬……（二三三）
斷章

一　國へ行きたや……（二三四）
二　くれ行く空……（二三五）
三　桐の木……（二三六）
四　カーテンのかげ……（二三七）
五　ネクタイ……（二三九）
六　木立……（二三九）
七　癈園……（二三〇）
八　讃美歌……（二三一）
九　きりぎりす……（二三二）
十　壁に染めたる……（二三三）

十一　音樂……（二三三）
十二　花束……（二三四）
十三　薄暮……（二三四）
十四　鶯……（二三五）
十五　芝居裏……（二三六）
十六　春の日……（二三七）
十七　秋の朝……（二三八）
十八　冬の日……（二三九）
十九　春の暮れ方……（二四〇）
二十　かきつばた……（二四一）

二十一　母の腕……（二四二）

ふるさと

濱の家……（二四四）
四つの袖……（二五二）
幼き歌
一　お月様いくつ……（二六四）
二　五兩で帶買うて三兩でくけて……（二六五）
三　糸屋の娘は器量よし……（二六六）
四　坊さん坊さん何處へ行きやる……（二六七）

五　京の三十三間堂……（二六七）
六　お銀小銀……（二六八）
七　ちさの木……（二六九）
八　養の河原……（二七〇）
九　明日は天氣ぢや旅立たしやんせ……（二七一）

わが來し方を見かへれば

モスコーの丘よいざさらば……（二七四）
ピラミッドの前……（二八〇）
陣頭に立つ人や誰れ……（二八六）

ウオーターローの夕まぐれ……（二九二）
わが來し方を見かへれば……（二九八）

芳水詩集目次　終り

芳水詩集

有本芳水著

旅より旅へ

粉河寺

馬の脊にしてかへり見る
春暮れ方の紀伊の國
松原かげに旅人の
すげ笠あまたゆきかひて
赤き夕日は橘の
花咲くらへに匂ふかな。

夏は熊野の浦すぎて
にほひゆかしく渡り來ぬ
阿波より來る藍賣は
村の紺屋を立ち出づる
燕の歌にふるさとの
暮れ行く春をおもふらむ。

紀の河、河原、河添を
のぼればここは粉河寺
赤き負笈白き笠

巡禮の子に打ち交り
西國三番『ちちはは』の
めぐみも深き粉河寺』
和讃を高う誦するかな。

さても美濃路の谷汲に
『親とたのみし負笈』を
おろすも母のためなれば
鉦鳴らしつつうたひつつ
行く手の空にあこがるる。

夜としなればただひとり
物がたりめく旅籠屋の
火影の前に色褪せし
赤き負笈おろさむを。

和歌の浦曲にあととめて
紀伊の町路の賑ひを
ただ見て過ぐる旅なれば
脚絆の紐のくれなゐも

眠れば夢に美しう
彩られつつ浮ぶらむ。

ああなつかしき南國の
紀伊はよき國寺寺の
塔にたなびく夏の雲
若き少女が花櫛の
繪卷のままに折れたるを
眺むる心地ふりさけて
そぞろ心地に仰ぐかな。

琵琶のみづうみ

雲むらさきに風白き
近江の國の畫下り
胡蝶追ひつつ雛僧が
湖ちかき松原を
つたひ行く頃三井寺の
鐘はさみしく響き來ぬ。

ふりさけ見れば京の空
濃き夏雲のたなびきて
ただ名のみなる逢坂の
關もむなしくつつまれぬ
川には花の散り浮きて
水には魚も躍るかな。

京より來たる巡禮は
大津の宿にあととめて
赤き衣織るうら若き

少女の唄をなつかしみ
明日の美濃路の澤路の
その寂しさを憂ふらむ。

鈴の音のみちやらちやらと
染分手綱ひかせつつ
紺のにほひのなつかしき
馬借の馬の春にして
瀨多の唐橋からかねの
擬寶珠の橋を越ゆるかな。

やがて膽吹も比良の峯も
うすむらさきに夕照えて
物語さへしのばしむ
赤き灯のちらちらと
動くあたりはなつかしき
石部の驛の宿ならむ。

風のまにまに聞ゆるは
船路を急ぐ船人の

棹とる歌か湖は
うす紫の流れ落ち
ただ音もなく泣く如く
竹生の島をつつむかな。

淺間山

八月たかき山越えて
信濃に入ればなつかしや
山毛欅、樺、檜もろもろの
木は木と亂れ小枝には
老鶯の聲さびて
雲は動かずとどまりぬ。

桔梗、苅萱、女郎花
小萩がもとに風立てば
旅なる人を乘せて行く
黒毛の駒も嘶きぬ
かへり見すれは東に
淺間は高く聳ゆるを。

頰に紅させし少女子は
畑に若芽の桑摘むと
白きすげ笠赤き帶

少女さびしてほがらかに
小唄うたへば野にかをる
白き小花もゆらぐかな。

ふりさけ見れば淺間山
黑き煙の渦まきて
空より野邊に流れ落つ
山の麓の町町の
白き壁には日のかげの
赤く悲しくたゆたひて。

ただ名のみなる沓掛の
村は悲しく泣くごとく
青く寂しくたそがれて
千曲の川の川波は
名知らぬ草を浮べつつ
信濃を北に流るかな。

ああ鉦鳴らし鉦鳴らし
檜原、松原、小松原

草かをる野を分けて行く
われは旅の子ひとり子よ
夕となれば追分の
赤き灯かげを戀ふるかな。

淡路島

歌の淡路の海越えて
繪島が磯に風立てば
秋やよき日のうるはしき
五色が濱に散る石の
一つ一つのいろどりに
旅の涙は湧き出でぬ。

島を南につらなれる
名も先山の頂の
巌にのぼり杖ついて
太古の姿しのぶれば
落日の名残むらさきに
神語をもしのばしむ。

小貝を拾ひ波に濡れ
千鳥の歌を聞きつつも
沙の上にただひとり

ちひさき城をつくるとき
袖をかざしてはるかなる
紀伊路の方を眺むれば。

音なく暮るる海の上に
由良より來る船ならむ
櫓拍子たかく船子等は
『あれは紀の國蜜柑船』
國のなまりの船唄を
たかく悲しく唄ふかな。

思へばわれは旅の子の
磯松原の松かげに
松葉ひろひて焚きつつも
笠にかぎろふ落日の
赤きいろひのたゆたひに
故郷戀ひて泣きにしを。

やがて港の町に入り
赤き灯ともる旅籠屋に

脚絆をとりて笠ぬぎて
行燈の前に船の子が
港港のうつくしき
その物がたり聞かんかな。

鈴鹿峠

もうしもうし旅の人
ここは追分逢の宿
鈴鹿にかかれば日が暮れる
腰をかがめて宿引は
馬で來かかる旅人の
袖をとらへてひきとめる。

お湯もしやんしやん湧いてゐる
何故に行く手を急がんす
鈴鹿は雨ぢや雨ぢやげな
黒漆つけた女房も
赤い襷をはづしつつ
泊まれと馬をひきとめる。

秋もなかばの鈴鹿山
逢の土山逢の宿
坂はてるてる鈴鹿はくもる

逢の土山雨が降る
馬子の小唄に日は暮れて
雨もぱらぱら降つて來た。

峠は三里なほ遠い
馬子よ急げと聲掛けて
手綱をふればちやらちやらと
鈴の音して松毬と
松の落葉のはらはらと
笠の小笠にまひかかる。

杉の並木に立ち起り
峰より峰にはひあがり
谷より谷に立ちのぼる
夕の靄はしつとりと
馬に掛けたる腹掛の
紺の色にも沁むならむ。

笠も着物もそぼぬれて
峠は雨に暮れにけり

行く手急がぬ旅人は
腰につけたる火の用心
煙管を出して馬の脊に
白き烟を輪に吹きぬ。

右は伊勢路よ左は近江
ここを過ぐれば下り坂
提灯ちらちら頰かむり
馬子は手綱をうちふりて
西は追分東は關所

關所越ゆれば茶屋がある。

奈良より

『名物ぢや名物ぢや
鹿の人形を買はしやんせ
お國へ土産に買はしやんせ
かへりは是非に』と如才なく
男、女や小むすめ
路にふさがる奈良の町。

衣かけ柳に八重ざくら
油の小路飛火の野
春まだ寒きさらぎの
奈良の都に來て見れば
杉の木の間にくれなゐの
神女の袴のほの見ゆる。

ちやらちやらと鳴る鈴の音
落ちし椿の花踏みて
二十八段きざはしを

のぼりて大き古寺の
くづれし壁に身をもたせ
古きにほひをかいて見る。

昔男や、宮人が
のどかなる歌うたひつつ
櫻かざして舞ひしてふ
大路小路はあともなく
七堂伽藍ただ荒れて
夕日は塔に榮ゆるかな。

ほろほろと鳴く山鳩は
木立がくれの古寺に
撞木をとりて雛僧が
力をこめてつき鳴らす
夕の鐘におどろきて
森をしたひて飛び去りぬ。

日は暮れ掛る鐘が鳴る
赤い小櫛の巡禮は

南圓堂に御詠歌を
鉦鳴らしつつ歌ふかな——
燈籠に赤い灯もついて
鹿もかなしく啼くものを。

京の春

櫻三月くれなゐの
日傘ゆき交ふ晝下り
右は紅屋よ左は紙屋
赤い毛布に股引の
道者も交る六條の
往來も繁き珠數屋町。

六角堂は京の臍
日も暮れ行けば紫の
しつとりぬるる夕靄の
中を斜に燕が飛んで
つういつういと家家の
紺の暖簾をかすめ行く。

やんがて赤き月出でて
塔より塔にさまよへば
二條三條家家の

灯は赤くきらめきぬ
中にも一しほ色濃きは
京極あたりの繪草紙屋。

牛若丸と辨慶が
討合ひにより名もたかき
五條の橋に來て見れば
千鳥は啼かず水音に
向ひの岸の染物屋
染屋の唄のまじるのみ。

櫻月なり朧なり

名高き三十三間堂

祇園清水智恩院

國への土産に見て行かん

ときめき心地あてもなく

さまよひ來れば清水や。

舞臺にのぼり眺むれば

京はよき町古さ町

ほんのり匂ふ月かげに

おぼろおぼろの夜の靄

鼓の音も町の音も

手にとる如く聞ゆるよ。

熊野浦

春の海路にあこがれて
紀伊の海邊の春の日を
胡蝶追ひつつただひとり
さまよひ來ぬる熊野浦。

灘の響は海近き
山より山に木精して

蜜柑畑に啼く鳥の
聲にうらみもこもるかな。

伊勢路より來し虚無僧は
さくらの花を春にうけて
口をしめして尺八を
ほろほろと吹き出でぬ。

網ひく子等があなうらに
踏まれては散る櫻貝

潮風さつとなる浪に
花も流るる海の上。

日は暖かに風かろし
鯨つく子は眉あげて
海の不思議を物がたり
とほき波路を指しぬ。

歩めばまたもはらはらと
櫻散り來る菅笠や

笠のひまより打ち見れば
名もなつかしき那智の瀧。

沙の上にあととめて
海見て行けば日は暮れぬ
波の渦卷汐けむり
陸もさみしく黃昏れて。

沖のくらいのに白帆が見ゆる
あれは紀の國蜜柑船

うたふをきけばなつかしき
國のなまりの船唄よ。

船唄消えぬ――路とほし
われは旅の子故知らず
涙は頬をつたひぬる
ああ南國の春の暮。

淺草

春の一日のつれづれを
母と詣づる淺草寺
下駄の足音からころと
響くもうれし仲見世や。

大鼓饅頭、唐がらし
人形賣る店、繪草紙屋

活動寫眞、喇叭の音
聞きつつ來れば雷門。

赤い提灯、金の額
毛布すがたの杢兵衞や
帽子なめの田吾作が
見あぐる顏に日も永く。

門を入る人出づる人
織るが如くに行き交ひて

念佛唱ふ道者等の
交るもうれし淺草や。

柱に染めしあと見れば
『同行二人京の人
魚がし連中、いろは組』
はりたる札もなつかしく。

汚れし者は許さじと
守る仁王は恐ろしや

あれ鐘が鳴る春の日も
暮に間もなき六つさがり。

傘が舞ふぞえくるくると
赤い日傘がくるくると
豆拾ふとて白鳩は
人なつかしく馴寄り來て。

堂にのぼりてちやらちやらと
鈴をならして額づけば

赤き灯は繪のごとく
降る賽錢は雨のごと。

金の瑤珞ゆらゆらと
ゆれては妙に響くかな
物に恐るる少年は
母の袂にすがりぬる。

甲斐より

梨子の花散る六月の
甲斐はよき國歌の國
透いても見ゆる白壁に
日は酒のごと濁り來て。

信濃にかへる馬追の
唄に恨も多きかな

破れたる笠に花散りて
春は甲斐より去りにけり。

鶯老をひた啼いて
川藍色に行きめぐり
ちひさき湖に落つる頃
赤き襷は野に見えぬ。

胸もあらはの駕籠かきが
都より來る絹買を

乘せて來かかる驛路は
白く煙の打ちなびき。

白酒賣が木曾路より
峠を越えて村に入る
柳並木の曖路は
行く手に小く富士見ゆる。

行く手急がぬ旅人は
霞の丘の麥畑に

かくれて青き麥笛を
暮れ行く空に鳴らすらむ。

水晶堀の若人が
山より村にかへり來て
藤の花散る野の家に
草鞋の紐を解くころ。

甲斐絹織るなる少女子の
涼しき歌と梭の音は

灯ちらつく家家の
ちさき窓より洩るるかな。

ああ日は暮れぬ甲斐の國
かくてさすらひ行き暮れて
旅の窓から野山を見れば
白く亂れて花が散る。

伊勢より

山むらさきに水青き
伊勢はよき國七月を
宿場宿場のあととめて
來ればここは龜山や。

檜小笠の旅人が
いこへる茶屋に日も永く

馬子の小唄に曇るてふ
鈴鹿は高く聳えたり。

阿濃の松原砂白く
阿漕が浦の浪さびし
あづま繪に見る廣重の
海の色のみ青くして。

桑名にかへる船の帆の
白きもうれし夏の日は

紫紺色なる大空の
南に白くかかりけり。

道づれなりし馬追は
手綱うちふり路をとく
伊勢は津でもつ賑ひの
阿濃津は程も遠からず。

時雨はまぐり貝細工
國への土産は盡きざらん

神代ながらの五十鈴川
今も東へ流れたり。

二見が浦に一夜寢て
網ひく子等に打ちまじり
小貝拾ひて歌かきて
渚の砂に埋め置かん。

逢の土山、伊勢音頭
母に聞きたる物がたり

山越え行けば宇治の町
古き家並もなつかしく。

草鞋にかろくふみしめて
とどろと渡る宇治の橋
ゆくさかへさの旅人に
袖振りあふも興ありや。

木曾より

すげ笠すがた夏の日を
草鞋もかろく踏みしめて
歌の名所かぞへつつ
たづねて來ぬる木曾の奥。

『木曾の御嶽夏でも寒い』
野袴かけて馬を追ふ

少女の唄に日は暮れて
杉の並木の長きかな。

ここは美濃路に追分の
宿場は路も遠からず
柳を洩るる夜の川の
烟の中に白うして。

飛驛の行者が吹きならす
貝の音とほく谺して

六根精淨ぢやらぢやらと
金剛杖の音もたかく。

蝦蟆氣を吐くか夜の道に
異香薫じてかをり來つ
祕密を語るもののごと
行者の聲も冴え行きぬ。

お六櫛賣る家〻家の
家並なつかし洗馬の宿

姿さびしくとぼとぼと
町に入る頃月出でて。

甲斐人乘せし駕籠かきは
月の山路をのぼり來ぬ
繪を見る心地湯の宿の
軒の行燈の灯は赤く。

旅籠の宵を蚊遣して
色たくましき强力に

山の不思議をたづぬれど
口をつぐみて語らはず。

厨のひびき湯女のうた
明日は行く手の長かるに
われは旅人ただひとり
頭陀を枕にいぬるかな。

播磨灘

瀬戸の内海播磨灘
廣重のごと色冴えて
紺と銀との夕暮は
海の上よりせまり來ぬ。

やあれ帆をまけ船を出せ。
月ほのめきぬ室の町

旅の女や商人は
船宿指して集りぬ。

格子づくりの家家の
中より洩るる赤き灯を
そがひになして荷をつくる
船の男は年若く。

船出待つ間のつれづれを
阿波に行くてふ旅僧は

行李の上にうつぶして
旅物語かたるかな。

南無象頭山讃岐なる
金比羅權現わが旅を
守らせ給へと手を合せ
祈るもうれし旅の身は。

四方山がたり國なまり
かくて船出は近づきぬ

赤き脚絆の巡禮は
灯かげに涙さしぐみて。

船頭可愛や播磨の沖で
一丈五尺の櫓がしわる

船は出でたり初秋の
月うつくしき夜の海。

船唄もよし夜もよし
柱のもとにかがまりて

港の方を眺むれば
白壁の色ただ白し。

やあれやれやれ船は行く
帆のざんざめき夜は更けぬ
かくて旅衆は一やうに
眼を閉ぢて眠りぬる。

日本橋

花のお江戸のまん中に
伊達をつくした日本橋
河岸にならんだ白壁の
倉に夕日はぱつと散り。

夢の如くに羽のべて
水の上とぶかもめどり

河の流れは廣重の
紺のぼかしの茜染。

橋の下行く猪木船
あれ櫓の音がきしるぞえ
水棹をとれる船頭は
くはへ煙管に豆絞り。

橋の欄干にただずみて
入日の空を眺むれば

綿繪に見る夕空に
三國一の不二の山。

日は暮れかかる河の面
河岸の向ふに荷をあぐる
若き男の木やり唄
水をすべりて聞え來る。

荷物かつぎて笠つけて
草鞋むすびてとぼとぼと

上る東海道の旅の空
五十三次それも夢。

鳥が啼くなる東路の
花のお江戸の日本橋
道中雙六骰子ころを
ぽんところばす日本橋。

槍をふりつつ供ぞろへ
西國のぼりの大名が

金の金具の駕籠にして
渡りし様もしのばるる。

わたる日本橋石の橋
河岸に灯はつく日は暮れる
ついしみじみと身に沁みて
水を見つるもやる瀬なや。

法隆寺

亂松一路すぎがてに
山もと烟る秋の日を
堤に添ひて野を越えて
たづねて來ぬる法隆寺。

破れし築地に身をもたせ
塔に入る日を眺むれば

緋のささべりも美しう
むらさきの色亂れ散る。

綠の甍地に落ちて
夢の如くに色褪せぬ
父母を招ぶ斑鳩の
聲は林におさまりて。

眉うら若き雛僧は
丹の細殿、むらさきの

紐に衣をひきしめて
足音もかろく傳ひ來ぬ。

靈場詣での杖かろき
大和めぐりの人人の
涙も交る御詠歌や
負笈を吹く秋の風。

女、わらべは紅の
脚絆の膝を折り敷さて

番のみ寺をとひしごと
立ちし佛にぬかづきぬ。

まだうら若き旅人は
赤、青、紫さまざまの
壁に染めたるいにしへの
壁畫のにほひかいて見ぬ。

鳴り來る血潮のどよめきに
見よ若人の白き頰は

女の如くなり行きぬ
あつき涙も交りつつ。

にほひは悲し日は暮れぬ。
行くな旅人秋の日を
行方かたらず安らかに
伽藍にねむれただひとり。

紀伊の國

秋も終りの紀伊の國
赤く夕日の照る坂を
乘合馬車は音たかく
濱邊の道に出で行きぬ。

紀伊はよさ國白浪の
知らぬ濱路の磯づたひ

和歌吹上をあとにして
急ぎて來ぬる玉津島。

鞭ふる御者は色くろく
髪に白髪も交るかな
乘合人は五六人
浪花商人、京むすめ。

黑漆つけて色しろき
旅の女は愛相よく

老いし行者は聲たかく
那智の不思議を語るかな。

馬車の中には笑聲
折折交る京なまり
ここは城下へ十一里
御者の喇叭の音たかし。

と見る路路村村は
音なく暮れて壁しろく

赤き入日のたゆたひは
蜜柑畑にてり榮えぬ。

馬車の窓より打ち見れば
一に權現二に玉津島
三に下り松四に鹽竈も
白き烟にとざされて。

行く手の丘には鳥の聲
うたふを聞けばなつかしや

姉さんかむりちらちと
蜜柑とる子が若き唄。

今日がわかれか紀伊の國
秋も終りか紀伊の國
旅にしあればしみじみと
暮れ行く空に泣かれぬる。

道頓堀

今日も朝からちらちと
ちいさな薄い雪が降る
宿の窓から芝居小屋を見れば
中座角座の春狂言
金と赤との看板の
姫の振袖美しう。

戸を開ける音締める音
からりころりと下駄の音も——
傘がよく似た蛇の目の傘が
姉とつれ立つ少年は
繪草紙店の前に立ち
綺麗な江戸繪に見とれてる。

どどんがどんと打ち鳴らす
芝居の太鼓の撥の音は
顫へるやうな寒空の

遠方までも響き行く
天王寺さて梅ケ辻
そこへも聞えて行くである。

格子づくりの商人の
暖簾にしるす筆太の
白き文字もなつかしや
帳場の奥には畫もなほ
薄らあかりにちらちと
赤い灯がゆれてゐる。

『めでためでたやめでたやな』
烏帽子すがたの萬歳が
拍子をとりて打ち鳴らす
少さき鼓の音は冴えて
川より川へ橋下の
橋の上まで響き行く。

橋の上には猿曳が
猿を廻して行く人に

一錢二錢の袖乞す
猿は道化て欄干の
上をつたひて身ぶりする
笑ひざめく人の聲。

前垂姿の番頭と
矢立をさした商人は
出逢頭に會釋して
大阪言葉で物語る
家號のついた唐傘の

上にも薄い淡雪が……。

芝居もやがて開くであろ
拍子木の音、笛の音
五郎、十郎、朝比奈の
吉例曾我の物がたり
勘亭流の肉太の
文字のにほひは春によく。
人形づかひの老人の

古びた荷物をとりまいて
其處へ多くの人が來る
人形づかひの老人は
年に似合はず美しい
聲を一ぱい張りあげて。

『その父さんや母さんに
逢ひたさ故に私は
西國するのでございます。』
多くの人はその聲に

貰ひ泣きして泣いじやくる
あれまた雪がちらちらと……。

大和めぐり

春は來りぬ山越えて
大和に入ればなつかしや
吉野の川の川上に
笠きて下る筏士が
笠の上にもはらはらと
雪の如くに花が散る。

馬に續いて二つ三つ
えいえいえいの聲たかく
京人乘せし駕籠が來る
ここは野崎のかへり路
堤づたひにくるくると
赤い日傘も舞つてゐる。

渡し舟待つつれづれを
旅なる人は三四人
柳がくれの掛茶屋に

旅の話をものがたる
黒漿つけて眉青き
茶屋の女房は笑顔よく。

わかれ路に立つ路しるべ
染めたる筆の跡見れば
左へ三里三輪の茶屋
菜の花つづく野の路に
朱塗の塔の見えがくれ
長谷のみ寺も遠からず。

里の童は五六人
長者が軒に打ち集ひ
めんない千鳥して遊ぶ
鬼になりたる子を見れば
顔色白う七つ八つ
稚子髷に結へるも美しう。

妹山かすむ畷路の
松の並木の根に憩ひ

脚絆の紐をはらひつつ
袖のひまより打ち見れば
傍畝、耳無、當麻寺
初瀬の里も程ちかし。

ほんに思へばこの日頃
母に聞きたるなつかしき
阿波の鳴門の巡禮は
負笈負ひてとぼとぼと
長い並木にかかり來る

どれどれ奉謝進ぜよう。

名も無き村に入りぬれば
少さき少女は縁先に
涼しき唄の音もたかう
からりはたはた機を織る
外には老いし虚無僧が
笛をほろほろ響かせて。
白壁つくり酒倉の

軒をはなれて立ち出づる
燕の春に春の日は
紺と銀とに光りぬる
暖簾のかげにもちらちらと
花はこ　て散りかかる。

奈良の旅籠にとまらうか
おつつけ暮れて來るであろ
山紫に水清う
大和は歌によきところ

行けば行くほど花がちる
あれまた寺では鐘の音が……。

思ひ出

倉

赤い夕日のさす倉で
唄うたひつつ酒つくる
但馬から來た酒男
色が白うて甲斐性もの。

軒の棟木に巣をかけた
紺と赤との燕は
翼さすつて鳴いてゐる。

若い男のさびた聲
頬かむりした豆しぼり
今日もこと無う暮れるぞえ。

たそがれ頃

たそがれ頃のさみしさや
壁にそひてはしみじみと

姉に聞きたるいぢらしき
お銀小銀の物がたり。

鍼醫

熱病みてこもれる日
俥にて鍼醫は來る。

手を握り頭を撫でて
『坊ちやんはよいお子』と

氷のやうな銀の針
手さはりのよき天鵞絨の函。

母上は氣づかはしげに
かたはらに座したまへり。

鍼醫の手のつめたさ——
ぱつちりと眼をひらき
母上の顏を見つむる。

ちくちくと燕のなく日
紫の桐の花の散る日。

粉雪

淡い粉雪が降るわいな
乳母と下女とはむかひゐて
世間ばなしに夜を更かす
村の芝居で見るやうな

かくれんぼ

圓い行燈もともつてる
舗の先では番頭と
小僧が寄つて將棋する
正月すぎの我家は
夜更けて來る客もなく
しんしんと沁む淋しさに
外では雪が降るわいな。

見つけた見つけた鬼になれ
そんなら逃げるよそらおいで
穀物倉のくらやみに
今日もするなりかくれんぼ。

由……良……さん待つたいな
倉の軒から蛇が
にゆつとばかりに顔を出す。
麥秋どきの晝さがり

遠くで細い草笛が……。
學校がへりのいたづらや
鬼になつたる口惜しさは
溝にころんで足打つた。

行燈

納戸の口に置いてある
昔からある置行燈

ある日かくれて筆とりて
へのへのもへのをかいて見た
翌日見れば行燈の
紙は眞白になつて居た
後から聞けばその紙は
祖母が貼られたさうぢやげな。

船男

港から來た船男

今日もわが家で酒を飲む
赤い灯にちらちらと
粉雪が降つて暮れるころ
船の男は傘さして
港を指してかへり行く。

春は行く

春は行く
少年の日の春は行く

柩

銀の針のさびて行くごとく
またたんぽぽの穂の空に立ちのぼるごとく。

春は行く
少年の日の春は行く
金色の釘の光れるごとく
また紫の桐の花のちるがごとく。

わが祖母は逝きたまへり
母上は白き衣もて
祖母上を覆ひたまひぬ。

『ああ吾兒よ今ぞわかれ』と
母上はかたはらに座す
妹の手をとりたまふ。

あはれ見る刹那の恐怖
ことことと柩うつ音

この世にて聞かん響か。

水晶の珠數つまぐりて
口口に念佛となふ。

線香の烟はのぼり
むらさきに室をただよふ
言ひしらず胸はせまりて
ほろほろと涙流れぬ。

祭の夜

十月末の祭の夜
乳母は里から樽下げて
久方ぶりでやつて來た。
獅子の囃しに夜は更けて
提灯の灯も泣くやうな

遠くの方からまれまれに
太鼓の音も聞え來る。

祭の晩のうれしさは
腰につるした鈴の音。

祭はすんでもすまいでも
乳母と一緒に寢ることが
うれしいことであつたつけ。

芝居ごつこ

少年の日のうれしさは
村の鎭守の假小屋の
芝居見に行くことなりき。

但馬から來た旅役者
舞臺で見たる恐ろしき
仁木の青い眼の色よ。

芝居がすんだそのあした
舞臺の上をとびまはり
我も役者の眞似をする。

『ハ　ハ　ハ、ハ　ハ　ハ。』

卷物くはへて花道の
下からにゆつとあらはれる。

土間の下から眞白な

二十日鼠が出て來たが
大方仁木の精であろ。

福助さんへ贔負より
芝居の引札は二三枚
雨に破れて血のやうに。

芝居の小屋のうしろでは
菜種の花が美しう
今をさかりと咲いてゐる。

隣の家

隣の家は石灰屋
となりの家の猪之さんは
生れてからの白痴もの。

縞の財布に天保錢
これだけあれば京まゐり
伊勢へも行けると喜んだ。

どうして行けると聞いたなら
につこり笑ふて猪之さんは
東の山を指した。

無花果

我家の庭に一本の無花果ありき
昔よりありといへど誰が植えしか知らず
折からを赤く熟して

ほとほと地上に落つる。

今し夕日はくれなゐに
落ちたる無花果の實をてらす。

しかれどもそれを喰へば
兩親の死目しらずと
誰ひとりとるもの無かりき。

春の夜

春の夜更けぬ母上は
雛の灯入れたまふ
笑ひさざめき袖つらね
少女はわが家にあつまりぬ。

十二一重のくれなゐに
夜のあいろは美しう
玉蟲色のくちびるは
雛の宵にふさはしや。

櫻月なりおぼろなり
衣桁にかかる振袖の
金絲の縫に赤き灯は
夢のごとくにてりはゆる。

袖に祕めたる香函の
にほひは誰のたはむれか
中の一人は内裏雛
雛の顏を眺めしが。

そのおもざしのなき母の
顏に似たりとささやきて
白粉つけし頰の上に
可愛ゆき涙流しぬる。

異人さん

神戸から來た異人さん
黑い帽子を横ちよに被り
暮れ行く春をわが村の

戸毎に立ちて耶蘇を說く。

きりしたんがきたと子供等は物めづらしくぞろぞろと異人の後をつけて來る。

與作の家の婆さんは位牌をしつかと袖にしてこれを渡してなるものか。

父の死

異人は身ぶり手ぶりして與作の軒に立ちけるが子供はわつと打ち囃す。

庭につかねた稻の穗に赤い夕日がぱつと散り日は暮れ方になつてゐた。

水無月の六日の日ぐれ
わが父は歸らずなりぬ。
遊よりかへりて來れば
ああ父は遂に居ますず。
軒朽ちて古びし家に
集りぬ多きはらから。
床の間の白き花散る

しかれども父は歸らず。
紫の父の唇
今もはた涙流るる。

柳の花粉

うすらあかりに齒をやんで
蒲團の中に寐てゐたら
破れ障子にちらちらと

柳の花粉が散りかかる。

歯はしくしくと痛み出す
柳の花粉は散り止まず
燕の歌に日は暮れて
隣の室では赤い灯が
ぱつとばかりについてゐた。

朱欒

あゝかの爺のなつかし
鼈甲の眼鏡をかけて顔赤き
われにザボン呉れたる爺のなつかし。

赤く熟れたるザボン
銀の匙の美しさ……
わが幼き心をそそつて止まざりき。

柔かき皮のザボン
とけ入るごときその味のなつかしさ

ああああかの爺のなつかし。

ヂギタリス

路ばたに咲くヂギタリス
赤く花咲くヂギタリス
學校がへりの畑中で
一つ見出でたヂギタリス。
狐のやうなヂギタリス

友は恐れて近寄らず
化けて出るから捨てよと言ふ。
晩にかへつて寢てゐると
ついありありとわが夢に
異人のやうな眸で
化けて出て來たヂキタリス。

紫に暮れぬる夕

坂つきて畑につづける
畷路の春のくれがた
顔見世の旅の役者は
からからと俥をつらね
隣なる村にいそぎぬ。

末とほく菜の花咲きて
その涯に日傘ゆき交ふ
うすくてる赤き日ざしは
濁りたる酒のごとくに

麥の穂をかすかにてらす。

みどりなす繁蔓の丘に
五六人人はたかりて
何ごとか聲たからかに
笑ひつつ話にふける
春の日はついに暮れたり。

少年は壁にもたれて
うすやみの畷の道を

しみじみと見つめてありぬ
家家に灯火つきて
風なきに梨の花散る。

少年はうつつに描く
今行きし役者の顔を……
もたれたる壁のいろひも
ああつひにつめたくなりぬ
紫にくれぬる夕——。

枕べ

熱があるので寝は寝たが
如何にするとも眠られず
なすことなさに枕邊の
赤いお盆の上にある
薬のにほひかいで見る。

枕屏風を見てあれば

枕屏風はうつくしき
忠臣蔵の草双紙
勘平さんの白い手に
赤い血潮はうす黒く。

柱に掛けし草紙には
いろはにほへと、かきくけこ
枕の先にぬぎ捨てし
着物のかげにはこうろぎが
細い音色で鳴き交はす。

熱ある心地リンゴルの
白い肌着の心よさ
青いコップに口あてて
冷たい水を飲んで見る
ああ頬はあつし秋の午後。

トランプ

姉上はクインを引きたまへり

姉

われは何となき口惜しさに
姉上の顔をねめかへす。

クインの青き眼の恐ろしさ
姉上の白くやはらかく細き手。

八角時計は青き幽靈の如く
かくて更け渡るああ夜は十時―。

からから俥は來る
うるはしき黑塗の俥。

姉上の長き振袖
そととへ顔を見上げぬ。

櫻さく春のおぼろ夜
姉上は嫁ぎますなり。

はらはらと櫻は散りて

姉上の髷にかかりぬ。

ほのかなる月の夜なりき
しとしとと俥は行きぬ。

祖母

夕ぐれを寺の鐘鳴るかうかうとまたかうかうと
祖母上は寺のかへり路遊びゐるわれをよびとめ
手をとりて灯ちらつく我が家にかへりたまへり

祖母上とわれは湯に入る祖母上のわれはいとし兒。

新しき湯槽の中に湯のたぎる音のみたかし
うす赤き行燈のひかり燈心の箱に蟲啼く
くぐる戸を斜にあけて湯槽より外面を見れば
母上は臼ひきたまひうす月に蕎麥の花散る。

甕

わが家にちさき甕あり

美しさ青磁の小甕。

和蘭の青海思ふ
甕の繪の白き蛇。

わが父は甕を指し
長崎の話に更ける。

美しきFantastic
しかれどもわれは得知らず。

のぞき眼鏡

五月まつりの宵宮に
のぞき眼鏡を見てゐたら
お宮の前へわつしよいと
綺麗に飾つた山車が來た。

山車に行かうか眼鏡を見よか
心をちをち見てゐると

のぞき眼鏡の老爺さんは
聲を一ぱい張りあげて
鞭をふりふり歌うたふ。

青い眼鏡を見て居れば
青いかげ繪のなつかしや
ついしみじみと悲しうて
何故か涙がこぼれ來る。

不圖氣がついてふりかへり

廣庭見れば廣庭は
人がひとりも居らなんだ。

螢

夏の日なかの螢籠
赤い頭の恐ろしや。

死人のやうな胸の色
紫紺の春の肌ざはり。

恐い、恐いと妹は
母の膝邊に驅け出だす。

つめたい銀の白い火は……。
悧口な啞者を思ひ出す。

晩になつたら赤赤と
芝居に出て來る幽靈か。

妹はちいさな手を拍つて

螢、螢とよろこんだ。

鷄頭花

秋の日なかの鷄頭——。
狂人のやうな眼つき。

あの狂人を思ひ出す
赤い赤い鷄頭花。

晩になつて寢てからも
鷄頭の花が恐かつた。

繪草紙

從弟と二人で繪草紙を
裏の倉から持ち出して
春の日向で見てゐたら
銀の聲して鳥が啼く。

赤い表紙はちくちくと
若い二人の眼にしんで
八重垣姫や清姫が
夢見るやうになつて來る。

古い繪本の手ざはりに
少さき吐息の遣瀬なや
ついしみじみと見てゐたら
知らぬ間に日が暮れた。

飴屋の笛

『切つても切つてもお多福さん。』
村の端れで今日もまた
飴屋の笛が吹き起る。

飴屋の笛の可笑しさに
時を忘れて見てゐると
はや黄昏のうすあかり。

『切つても切つてもお多福さん』
家には母が待つてあろ
かはたれ時の薄あかり。

赤い椿

赤い椿の花が散る
縁先に出て縫物す
母が手先の針の色。

赤い椿の花びらと
紅の甲斐絹のくれなゐと
折折動く白い手と……。

金色に散る冬の日は
青く落した眉にてる
黒漆つけた黒い歯に
赤い椿がよく似合ふた……。

たんぽぽ

裏の畑に出て見れば
黄色な夢のたんぽぽが
暮れ行く春を語り顔。

風にまひ行くたんぽぽの
白い穂先の手ざはりは
太三味線の三の絲。

つういつういとまひのぼり
壁のあかりに蟲とびて
やがて日暮となりにけり。

青き鳥

青き鳥啼く春の晝
村の學校の教場に
オルガンの音の起るかな。

イギリス卷の女教師は
しづかに細き鞭とりて
手ぶり上手に節あはす。

またも啼けなけ青き鳥
赤き椿ははらはらと
ガラスの窓に散りかかる。

オルガンの音はかなしげに
窓より外にひびき行く

またも啼け啼け春の鳥。

傘

ころころと下駄の齒の音
雨の日の蛇の目の唐傘。

舗先に繪を書き居れば
人人はのぞきて通る。

敷石に衣の音して

前に立つ見知らぬ女。

暖簾をぬらす柳の雫
雨の日の蛇の目の唐傘。

花火

柳の下の川端の
水にのぞんだ涼み臺。

川の向ふでむらさきの

花火線香がまひあがる。

橋の下行く涼み舟
意氣な年増の白い顏。

きりり結んだ晝夜帶
かはたれ時のうすあかり。

夕立の雨にぬれたる蜘蛛の絲。

花散る日

はらはらと花ちる日
わが伯父は馬で來た。

紺色の燕は
軒の巢で鳴いてゐる。

伯父君の柔和な眼つき

漆のやうな黒い髭。

襟のついたフロックコート
外國人のやうな眞黒な帽子。

伯父は聲たかく笑ふ
一ときを夕日があかるく。

銀時計

たそがれ頃のさみしさは
銀の時計を見る心地。

父の大事な銀時計
チックチックと音を刻む。

漂泊

浪

童は來る
砂山へ。

月は黄色にかがやきぬ。

童は笑ふ
月の色

海

寂しき一夜
浪の音す。

からからと網を曳く音
十月の南國の海。

沖はみどりにうすぐもり

浪はこだまの音をかへす。

ああただひとり恐じつつも
海の笑を眼に描く。

顔

船の中君はねむりぬ
北國の港を出でて
青白き月の光りに
顔もまた冷えけるころを。

海の上月の光は
やつれたる老女のごとし
折折に船の腹うつ
心なき波のたましひ。

時にまた君の片頬も
しづやかに照らされ初めき
白き齒はさみしく動き

涙さへ頬に流れぬ。

君が行く港はとほし
夜は更けて死したるごとし
潮騒の音は起りぬ
青き海ああただひろく。

深夜

わが影を

われと怪しむ
ふる里の山の夜なりき
乳の如しづくをこむる
湯のなかに月は宿りて
青白くさみしくゆれき。

夜は更けて燈火青し
湯のたぎる音にききほれ
旅人は夢を思ふや
うるみたる兩の眼に

かすかなる涙うかべぬ。

月の色いよいよ青く
湯の上を流れて行きぬ
折からを湯女のうた聲
旅人は湯槽の中に
ふる里の人をおもへり。

海路

船は動きぬ夕ぐれの
港をいでてしづやかに
波の上行くその時し
旅商人は帆柱の
かげに海路を愁ひぬる。

夕日は今し色あかく
熟りたる實の色かとも
浪にかげひくさみしさに
旅の女は眼をとぢて

船板にこそ居よりぬれ。

旅の女は何事か
思ふさまなりつと動き
『いかに船路は商人よ
悲しからずや海を見よ』
旅の女の眼の色は
いとかなしげに冴え行きぬ
音なく暮るる夕ぐれの
赤き入日と、青き海。

日光と少年と

青ざめた浪のとどろき
ほの白い月光をあびながら
二人の少年が砂山の上に寢ころんでゐる。

砂の上にのこした足跡
砂の上にかいた幼い繪
ありありと白晝の思ひ出が

情なく悲しく湧いて來る。

白壁に流れた血汐のやうに
眞赤な花が砂の上に咲いて
若い二人の瞳にうつつた
花びらは月光にふるへてゐる——。

二人は笑つた
月光も青ざめた笑を見せた
浪の音にだんだんと夜は更けて行く。

港の町

淋しい南國の港の町を
破馬車に乘つて
少年が行く。

少年は悲しい故郷の歌をうたつた。
兩側の家家には
美しい繪行燈がともつてゐる。

若い女が蒼白い顔をしてその側に立つてゐる
女は少年の顔を見た
少年はほほゑんだ
何となしに姉のことが思ひ出される。
馬車の赤い旗は月の光にうなだれてゐる
少年は女の顔をしみじみと見つめた
その眼には一ぱい涙が浮んでゐる。

波

少年は砂山を走つて下りた
『ここはお前の棲家だ』
浪の音が少年の耳にはかう聞へた。
眞暗な海
浪の音は狂人が笑つてゐるやうだ
少年は不圖母の死を思ひ出した。

磯の漁師の家でしきりと破三味線の音がする
まぼろしの思ひ出、まぼろしの繪
その音が母の吐息に似てゐる。

『お前も來い、お前も來い』
くらい海からまた波がささやき交す
少年はわすれ心地で砂上を走つた。

ダリアの花

白いリンゴルの床の中からも
青い月の光が見える
少年はうつぶしになつて泣いてゐる。

花瓶に生けてある赤いダリアの花は
ほろほろと床の上にこぼれて來た
月光のかなしみとその花の色。

死んだやうなしづかな夜

それが何時まで續くことだらう
少年は矢張り泣いてゐる。

落葉林

かさかさと音する落葉林の中
小鳥は枝より枝にとび
日かげは木より木にはふ。

ぱつと照らす日かげを身に浴びて
われは小鳥のごとく林に入る。

春の日はいづこにありや
夏の日はいづこにありや
われも小鳥となりて歌はんことを願ふ。

淨瑠璃

女の眼のやうにうるんだ赤い燈火は
並みゐる人の横顔をかすかに照らす。

赤い天鵞絨のカーテンが

涙ぐんだ眼のなかにうつつて來る
女は椅子によりうつむいて
ことことと白い指先で調子をとつてゐる。

寂しい秋の一夜
皆の人は舞臺に立つた呂昇の顔を見つめてゐる。

太い百目蠟燭の赤い火が
風もないのに動いてゐる。

高い美しい聲は
心の奥まで響いて來るやうな……

太棹の撥の音
蝶のやうなその手つき。

憂にむせぶ涙がほ
一時は小鳥の歌のやうに……
『見れば見る程胸せまり……はなれがたなき
うき思……

名殘惜しげにふりかへり……

どこをどうしてたづねたら……とときさんや

母さんに……逢はれることぞ逢はしてたべ……』

女の白い頰には

つめたい涙が流れて來た。

からからと籠の下りる音

人人はほつと深いため息をした。

森

さびはこし森にきく

なつかしき秋の音。

夕ぐれの寂しみは

木のかげに嘆かひぬ。

森の色――わかき繪よ

鳴きかはす鳥の聲。

落日の光りは
あきらかに透ける見よ。
その森にわれは入り
おもひ出に泣かまし。

潮のひびき

暮れかかる夏の夕を
南國の海邊に立ちて
流れ行く光のなかに

わかやげる友の姿の
繪すがたを胸に描きし。

青ざめし夕の空は
かなしげにうすらぎ初めぬ
遠方は汐にくもりて
むらさきの色となりぬる
やがて見よ眞白き鳥は
いづくへかのぼり行くらし。

いま波に描ける姿
うるはしき夢にも似たり
消え行きてまたもあらはる
波の上友の顔
わが胸に幾度沁みし
なつかしきそのほほゑみも……。
灰色の日ぐれの色は
音もなくせまり來りぬ
ああ彼方彼地の磯に

友もまた愁に入らん
われもまた愁に入れる
くれかかる夏の夕よ。

思ひ出はげにもいたまし
一とせの春の夜なりき
ほのかなる月のひかりに
うなだれて森をあゆみし
昨日の日のわかきおもひで
今胸にほのめき初めぬ。

日ぐれの町

海こひし島の遠鳴
いつしらず日は暮れ行きて
波の音も、砂上に刻む
わがかげもおぼろになりぬ
青ざめし浪のゆらめき
幾日か胸に沁むらむ。

夕ぐれの色に追はれて
うつむきて町行く人よ。
つかれたる顔あげて
はなやげる物の音きけ。
年とりし人形づかひは
うすぐらき辻に消えたり。
あなくづる夜のうすかげ

力なく町を吹く風。

青き窓築地をもるる
いと細き讃美歌の聲。

ちいさなる陶器舗の
窓かざる和蘭の皿。

敷石を急ぎて歩む
女等の雪駄の鼻緒。

珈琲店のガラスの窓に
ちらと見る土耳其の帽子。

つかれたる顏あげて
花やげる物の音きけ。

夕ぐれの色に追はれて
うつむきて町ゆく人よ。

寐顔

圍爐裏の前に母親は
稚兒を抱きて居睡りぬ。
木の燃ゆる色、火の飛沫
疊をはへるうす煙。

炎の吐息鐵の
火箸も、灰も朱となりて

默しぬ——。ただに聞ゆるは
湯氣のつぶてのたぎる音。

たちまち開きまた閉づる
母と稚兒とのかろやかの
眠りの見ゆる眼には
ほそき涙のいながれて。

『坊ちやんさよならお起きなさい。』
鸚鵡の聲に母と子は

不圖おどろきて眼をひらく。

八角時計はかちかちと——
夜は十二時稚兒は
可愛き唇を動かしぬ。

青ざめたる空

青ざめたる空を見る若き男よ——
しづかなる六月の日沒どき

黄昏は啞者の如く林にせまり
小鳥は枝より枝を鳴いてとべり。

葡萄色なる夕ぐれの空は
りんねるの床に永く眠りたる女の顔のごとし。

花やかなりし白晝の思ひ出
いたましかりし白晝のかなしみ
それらはすべてはかなく記憶にのこるのみ

思ひ出は鼓弓の糸の手ざはり
かすかに浮び出づる歌の一ふし。

白壁

何の影もうつらざる白き壁に
ああまた今日も見ゆるなき人のおもざし……
若人は壁にもたれて泣けるなり。
夢の如くそそり立つ白き壁に

赤き夕日はしづかに首をたれぬ。
しくしくと泣く如き夕ぐれの淋しみは
忍足して若人の後よりせまり來る。

波のつれびき

海ちかき國にわれは生れたり
さればわれはつねに波のメロデーアを好む

ああ思ひ出のはかなき心のときめきは
そのつめたき波のメロデーアに連彈す。

青ざめたる海よ
老女の如くしづかなる海よ
われを育てたる綠の海よ
われはつねに汝とともに咽び泣くなり。

月光を浴びつつ

教會の尖塔に夕の鐘起る
うらかなしき都會の秋の夜に
月光を浴びつつ路ゆく人よ。

われはいまだその面ざしは知らざれども
ふる里人のごとく君をいつくしむ。

月光と音樂

おぢつつひとり

眼に描く
月のメロデーア
青き色
若き悲しみ
そのなげき
聲はりあげて
うたへども
ただにうれひの
音なりき。

吉備の一夜

月あかき夜の思ひ出——
路ははてしもなく白く打ち續き
俥はからころと街を行く。
白壁は胸のごとく月夜にそそり立ち
赤き花は女のごとくうなだれて咲く

ここに忘れ得ぬ思ひ出の古き繪あり
ここに癒えざる胸の痛みあり。
月光に青き吉備の一夜よ——。

冬の午後

白く散らばれる日かげを浴びて
女は小ばしりに物の音する町を歩む。

煉瓦の壁にそひて走る俥の音の寂しさ
白き壁の前に立つて日向溫りせる男の顏の寂しさ。
女は劇場の前に立つて何事をか思ふ——。
太鼓の音、三味の音色、長唄の聲。
花やかなる看板の繪と金の金具に
冬の日足は夢の如くにぱつとちりぬ。

看板に見ゆる役者の顏の寂しさ
ちらばれる白き日光の寂しさ——。

日本橋の晝

十二月の晝の日本橋
青い菓物のにほひ
川岸の壁にうつる日かげの寂しみ。
とけ入るやうに何處からか聞えて來る

新内のこころいき。
役者のやうな顏をした男は
水の流れを見つめてゐる。
ちやらちやらと石駄の音をさして
女は橋の上へ來かかつた
十二月の晝の日本橋。

壁畫

涙ぐめる眼に
われは見る古き壁畫を。
畫のなかの少女の
白き頰、赤き唇。

わが心つめたく
壁にむかひ吐息す。

夜の室

夜もすがら波のゆさぶりかつ近く
心にひびくその時よ。

燈火あかくしめやかに
かぎりも知らず闇に沁む
夜のにほひはかすかにも
そそぎて青く消え行きぬ
あなや見まもる室の内
ひびきぬ波のゆらぐ音
あるは遙けき古里の

小島のかげの潮騒も。

その一夜悲しみの色身に沁みき
身ぶるひすなる月光も。

そのかげならでともし火の
光を逐ふと見てあれば
縫はるる如く眼は閉ぢて
かすかに動くわが手足
胸のとどろきあなちかく

耳に止め得ぬとほき音
くづるる痛みあさても
抱けよ床を眼のあたり。

夜はつきぬ旅の追憶いまもなほ——
月光にぬれたる海も。

ときめき心口づけむ
寝床の綾羅は波かとも
迷ひぬされど室のうち

あつるる面も唇も
ふるへり強き眩暈に
その交睫の瞬間を
うかびぬとほきふる里の
月にゆするる海の寢姿。

隣室

隣室の人の聲音に
旅の男は夢よりさめぬ

相模屋と太くしるせる
行燈の火影はゆれき。

涙ぐむ青きまなざし
夜のかげにふりむきつつも
痩せし頰に兩手を當てて
うすぐらき障子を見入る。

障子には黒き影見ゆ
帶のかげ――顏のかたちも

さすらひの夢をつづけて
旅の男は寂しう笑みぬ。

花やかなる瓦斯の下

花やかにともる瓦斯の下
安楽椅子の上の色しろき人
卓上になげ捨てられたる赤き花束
音楽は夜もすがら寂しう響く
みどりのカーテンは風もなきに動き

人人は銀色の夜をかすかに吐息す
ガラス戸を濡らすつめたき粉雪
花やかなる瓦斯の下に頭をたれて
われはひとり役者ならぬを悲しむ。

かはたれ

うす桃色いろの花が散る
うす桃色の花びらは
早かはたれの薄あかり

庭につづいた垣の外
唄うたひつつとぼとぼと
人形づかひが來るわいな。

そぞろごと

暮れ行く春の寂しさは
赤い表紙の繪草紙を
納戸に見たるその心地。

暮れ行く春の寂しさは
おらんだ皿にかかれたる
さんたまりあを見し心地。

暮れ行く春のうれしさは
童ごころに故もなう
銀の喇叭を吹く心地。

薔薇

月夜薔薇の花をつみ來つて
その赤き花びらの色にさめざめと泣く
わが心ある時は女のごとく
またある時は少年の如し
かくて我はその花の色を忘れじ。

病院

小鳥なく春の眞晝
何處からともなしに
銀笛の音が泣くやうに聞えて來る。
病院の長い廊下
若い看護婦はすりつぱの音を輕くさせて——。
肺病患者の寢てゐる一等室の屋上庭園では
白い花がうなだれて咲いてゐる。
官能に沁み入るやうなころころほるむのにほひ
白い壁のつめたい色
何となしに人死ぬけあひ。

門づけ

六月末の日ぐれどき
今日も門邊て三味の音す
若い女の横顔に
赤く亂れて散る日かげ
その門づけの三味の音を
聞けば亂るるわがこころ●

棕梠の花

故郷の庭に生えたる棕梠の花
ほのぐらく青味を帶びた棕梠の花。
夏來るごとに生生と
綠の吐息をするであろ。
故郷の庭に咲いたる棕梠の花
ほんに戀しい棕梠の花。

きりぎりす

きりぎりす
銀の音色で鳴いてゐる
病院の
かはたれ時を泣いてゐる。
若い女の死ぬ氣合。

きりぎりす
春中あはせて泣いてゐる。

岬

岬の遠を船が行く
赤い腹した船が行く
金の入日の赤い海
立つて眺むるわがうれひ。

斷章

一　國へ行きたや

暮れ行く春のうすあかり
紺と白とのつばくらは
みどりの聲でうた歌ふ
工場がへりの女等の
家路にいそぐ日ぐれどき

そのつばくらの歌きけば
國へ行きたやかへりたや。

二　くれ行く空

しやぼん玉の風に吹かれて
暮れかかる空に消え行く淋しさ。
子供達の玩具の太鼓の
暮れて行く空にひびく寂しさ。

わが心また悲しうなりて
暮れ行く空を見つめぬる寂しさ。

三　桐の木

父上とともに植えたる
ふる里の庭の桐の木
年毎に枝はさかへて
紫の花をつけぬる。

むらさきの花は亂れて

酒倉の壁にちりけり
酒つくる男の唄に
ちくちくと燕の鳴く日。

その幹にむかし刻みし
ざれ書きは今も消えねど
なつかしき父はいまさず
花を見てわれは泣きぬる。

四　カーテンのかげ

カーテンのかげにしのびて
かなしげに泣くこうろぎ。

ころころと、またころころと
かくて夜は銀色に更けたり。

月は窓より射し來つて
眠られざる我頰を青くてらす。

こうろぎ、こうろぎ

かくて夜は更けたり——。

五　ネクタイ

友がつけたる水色の
その子クタイのなつかしさ。

ストーブかこむ冬の夜を
さざめ雪降るなつかしさ。

六　木立

はるかなる木立に
銀色の笛の音す
野につつく白き路
その色のなつかしき
くれて行く空を見て
旅人は身ぶるひぬ
かすかなる笛の音
旅人はわれなり。

七　廢園

廢園の眞晝の徑に
色あせし薔薇の花よ——
いと白きあなうらに
ふまれてはくづれたり
薔薇の花薔薇の花
わが心いたましき。

八　讃美歌

港にちかき洋館の窓より
今宵も妙なく讃美歌の聲す

長くつづける桟橋の上を
月光を浴びつつ散歩す。

九　きりぎりす

壁の小かげできりきりと
夕ぐれを啼くきりぎりす
夏のゆうべの薄あかり
意氣な年増の黄楊の櫛。

十　壁に染めたる

壁にそめたる歌の一ふし
とりとめもなきいたづらの落がき
きえもはてずそのままに
六月の夜を青き月照る。

十一　音樂

野のはてより起るかすかなる音樂のひびき
われはひとり啞者のごとく壁にもたれて
そのかすかなる音樂のひびきを聞く

十二　花束

美しき馬車の中より投げ出だされたる花束
われはその花束をひろひて泣く。

ひろき路は野のはてにつづきて白く
かくて月の夜をしづかにさくら花散る。

十三　暮

暮れかかる町に起る

電車のひびき――
川岸の白楊は夕の風に
銀笛のごとふるひ泣けり。
洋館の卓上には
トランプの札うつくし
かくて公園にも夜は來り
噴水はしのびやかにため息す。

十四　鶯

今日も昨日も鶯が

青き窓べに來ては啼く
ほんに淋しいわが心
鶯、鶯何故に啼く。

十五. 芝居裏

月青き夜の芝居裏
まはり舞臺のかけ聲聞けば
何かは知らずわが心
悲しうなつて泣かれぬる。

十六 春の日

春の日は
學校がへりの子等達が
とつてはすつるたんぽぽの
その白き穂に赤くてる。

春の日は
學校がへりの子供等が
かいてはけした白壁の

その樂書に赤く照る。

十七　秋の朝

秋の朝のさみしさ
ぬぎ捨てられた羽織の甲斐絹裏の赤い色が
ちくちくと眼にしむさみしさ
剃刀を頬にあてて見ると
ひいやりとして……
身ぶるひするやうな恐ろしさが
身にしみじみと湧いて來る

鏡臺のうしろでは
銀の音をふり立てて
こうろぎが鳴いてゐる。

十八　冬の日

冬の日は
津輕がよひの船の帆と
甲板にゐる船長の
赤き顔をばてらしけり。

冬の日は
江差がよひの船の帆と
甲板にゐる商人の
青き顔をばてらしけり。

二十　春の暮れ方

鶯の鳴く春の日のくれがた
金色をして花が散つて來る。
鶯のなく春の日の暮方の淋しみは

若い役者の顔についた
白い白粉を見るやうに
何とも言はれぬ悲しい心地。

二十一　かきつばた

廣いお池のまん中に
一本咲いたかきつばた
夜になつたら美しい
紫紺の夢を見るであろ。

二十二　母の腕

蠟燭をともして
わがまくら邊に來たまへる
母君の腕の白き色
われは夜來る毎に
その白き色を思ひ出づ。

ふるさと

濱の家

日も暮れ果てた濱の家
遠くで浪の音がする
窓の内から港を見れば
北前船や帆前船
錨を上げる帆を下す
若い船頭の唄の聲。

赤い灯はちらちらと
水に映つてまた消えた
岬の向ふで櫓の音が
浪の絶え間にするけれど
眠つたやうな港では
舟招ぶ人の聲もせず。

雪さへちらちら降つて來た
悲しい寒い聲立てて
千鳥は沖で鳴いてゐる

燈臺守の爺さんは
今宵も舟を押し切つて
島の向ふへ行くであろ。

またさらさらと粉雪は
庭の妻戸に降り掛る
しんしんと泌む淋しさに
夜は次第に更けて行き
八角時計はかちかちと
音を立てつつ進み行く。

狹い納戸で姉弟は
やがて船からかへり來る
父を待つ間の手すさびに
鶴を折るとて白紙を
さくさく切ればちやらちやらと
剪刀についた鈴が鳴る。

姉は十六。弟は十四
炬燵にかけた草色の

蒲團の上には赤い灯が
夢の如くにこぼれ來る
屏風に染めしあと見れば
忠臣藏の草双紙。

それにも飽いた姉弟は
なすことなさに千代紙を
霰に切つてふりこぼす
笑ひさざめく夜の部屋
姉の肩着のくれなゐが

夜の寂寥にふさはしう。

夜も更け渡る濱の家
沖の遠くでポーポーと
蒸汽の笛の音がする
淋しい寒いこの晩に
海のあなたへ行く人は
さぞや寒かろ、淋しかろ……。

父のかへりの遲いので

母はいまなほとつをいつ
果ては我兒に打ち交り
海の話といぢらしき
『對王安壽』のおとどひの
古き話を物がたる。

門の外では父の聲
『父さん今か』と姉弟は
納戸の外へ驅け出だす
涙ふくんだ姉弟は

何で悲しいことがあろ
遠くで千鳥が啼いてゐる。

四つの袖

妹

長くつづいた小松原
松原かげの砂山に
黄色い花も咲いてゐる
そこはあたしの家の前
あたしの家から水色の
空にさみしい鳥の音も

浪のひびきも聞えるわ。

姉

つかれたやうな浪の音
消え行くやうな水の色
落日の前でただ二人
空を眺めて父さんの
お國を思ふたこともある。

妹

この小松原この磯で
櫻亂るる春の日は

姉さんと兩人で雛まつり
祭のはてはまた兩人
波打際で七色の
貝を拾つて城つくり
遊んだこともあつたわねえ。

姉

南から來た可愛らしい
赤い負笈春にした
巡禮の子がこの磯へ
かなしい歌をうたひつつ

來た時のこと――南國の
海岸にある磯寺で
白い衣きた雛僧が
鐘つきながら血を吐いて
海に入つて死んだといふ
悲しい話も聞かされた……。

妹

泣くやうに浪の音がする
今日を限りに姉さんは
私をのこして月の夜に

向ふの島へ行らつしやるの

あたし本當に悲しいわ
海のとほくへ落ちて行く
秋の落日は招いたら
とどまることもあらうもの
落日でさへもさうだのに……

二十五反の帆をまいて
虹美しい島めぐり

姉さんと二人でするのなら
うれしからうに姉さんは
たつた一人でいらつしやるの。

わかれたあとで私は
月が上つたこの濱の
小山の上で領布ふつて
歌をうたつて泣きますわ。

姉

今年の夏にこの磯へ

赤い夕日にてらされて
船から來られた船長が
『お前等二人はこのやうに
遊んでゐるがのちのちは
私のやうになること。』と
笑ひながらに言はれたが
そんな言葉も何となう
今しみじみと身に泌むの。

妹

あれ姉さんの髷の上に

夜の蝶蝶がとまつて
振袖あげて姉さんは
何故に蝶蝶を追はないの。

姉

少さい時に母さんに
教へて貰つた潮汲の
舞も今宵が舞ひをさめ——
四つの袖をくみ合せ
月美しいこの磯で
二人で舞つて見たいわねえ

あれ磯寺から鐘の音が
あの鐘の音は磯ぎはの
父さんの墓にも傳わるわ。

妹

姉さんの行かれる島の海と
ここの海とはつづいてゐる
貝の片葉に臙脂入れて
あたしが浪に流したら
姉さんの手に入るでせう。

鶯になり島國の
姉なる姫をしたひたる
それは昔の物がたり
丁度あたしに似てゐてよ。

人形箱にしまつてある
人形も悲しい顔をして
必度わかれを泣くでせう
さうでなくとも悲しいに

浪の音さへするのだもの。

だけどもだけども姉さんの
こんなうれしいおわかれに
泣いてゐるなんていけないわ。

姉

しぼんだやうな月の色
かなしい波の音に交り
千鳥もとほくで鳴いてゐる
つの袖をふりはへて

あたしが嫁いで行くといふ
向ふの島は十六里
その時一人で貝とつて
それに歌かいて流したら
月のしづかな磯ぎはで
お前は拾ふて呉れように……。

幼き歌

一　お月様いくつ

『お月様いくつ
十三七つ
まだとしやわかいな』
お月の晩に
紺屋の門で

紺屋の娘の
簪をひろた。

二　五両で帯買うて三両でくけて

『五両で帯買うて三両でくけて
縫目へ縫目へ金房つけて』
匹太鹿の子がよく似合ふた
匹太鹿の子の言ふこと聞けば
わたしやお江戸の下町育ち
雪がちらちら降る晩に

母と燵火でさしむかひ
今宵も火事があるさうな。

三　糸屋の娘は器量よし

糸屋の娘は器量よし
今日もお倉の戸のまへで
いつちく、たつちく毬をつく
毬をつく音ぽんぽんぽん
毬の糸から日がくれそめて
ほんのり赤い日ぐれどき

あれまた花が散るわいな。

四　坊さん坊さん何處へ行きやる

坊さん坊さん何處へ行きやる
あの山越えて川越えて
わしは在所へ酒かひに
わたしや連れて行きやしやんせ
狐が化けて出る程に。

京の三十三間堂の佛の數の
顏を一一見てゐたら
あたしの父さん母さんに
似てゐる顏もあつたげな。

六　お銀小銀

可愛さうなはお銀に小銀
盆が來ようが正月が來よが
帶もつけねば簪もささず
今日も今日とて母さんの

墓場の前で泣いてゐた。

七　ちさの木

うちの裏のちさの木に
とまつた雀の言ふことと聞けば……
よんべ貰うた花嫁は
色が白うて器量よし
村の庄屋の箱入むすめ
年は十七名はお京
たかい島田にたけながかけて

たれに見しよとの臙脂黒漿つけて
馬にのられてまゐられた
馬の來る路花咲く峠
あれさ出て見よ嫁御が通る
嫁御祝いませよこれこの通り
箪笥長持やつこらさと擔いで
供をつれつれまゐられた。

八　賽の河原

賽の河原の砂手本

いろはにほへと幼兒が
一つつんでは父戀し
二つつんでは母戀し
三つ四つに日は暮れそめて
賽の河原に月が出た。

九　明日は天氣ぢや旅立たしやんせ

もうしもうし旅の人
明日は天氣ぢや旅立たしやんせ
夕燒小燒

西の空があかい。
草鞋もそろへてある程に
明日は天氣ぢや旅立たしやんせ。

わが來し方を見かへれば

モスコーの丘よいざさらば

古き繪に似るモスコーの
墓場のさまにくづれたる
塔に夕日は血のごとく
濃きくれなゐに流れ行く
寺院の鐘はふるへつつ
丘より丘にすべり行く。

塔に渦まく黒けむり
阿鼻叫喚ぞわたり行く
火の粉散り來るそが中の
くづれし壁に身をもたせ
匂ひ褪せたる花束を
拾ひてひとり泣くは誰ぞ。

昨日ききにし王城の
小鳥の聲よ今いづこ
天地濛塵ものすごく

クレムリン城夜すがらの
琴はあやしくおののきつ
星も涙の色を帶ぶ。

馬いななかず風寒く
旗ひかりなく路とほし
さながら老いし囚人が
斷頭臺にのぼるごと
四十餘萬の大軍を
ひきゐてわかるモスコー府。

歡樂の歌いまいづこ
玉樓の夢はやつきぬ
王城の宴それもまた
古き繪に似るまぼろしか
モスコーにわかる喇叭の音
悲しく細く消えて行く。

高きにのぼり劔ついて
鐵馬に鞭つ英雄も

若き少女が化粧屋に
古鏡見る心地して
黒くもくらき王宮の
空のあなたを見かへりぬ。

モスコーの丘よいざさらば
運命の丘よいざさらば
わかき人人よいざさらば
行方はいづこボロヂノウ
まぼろしのごと消えて行く

モスコーの丘よいざさらば。

ピラミットの前

春の眞晝や君はいま
ツーロン港を出發す
海若底にかくれ行き
みどりをこめし薄がすみ
海づらとほくたてこめて
蜃氣樓にも似たりけり。

行く行く戰を交へつつ
七月カイローに到着す
行く手に見ゆる金字塔
灰色の丘スフヰンクス
銀の如くに燦爛と
白く輝く敵の楯。

戰はいま初まれり
鼓角の音は蓼蓼と
天にとどろき地に鳴る

赤き焔は眼の前に
地獄繪のごと流れ來て
ふりさけ見れば天津日は
渦の如くにかかりけり。

馬を進むるマメリユーク
劍の光丘に見ゆ
戰は今酣なり
濛濛たりや黑けむり
紅の旗も破れ果て

烽火の色も力なし。

佛軍の旗色褪せて
仰けば夏の大空は
みどりにこめてたそがれぬ
ああ陣頭の將軍は
かなしきあとを眺めつつ
高く聲しぬ『戰友』と。

『ああ戰友よ塔を見よ

五千年來この塔は
汝の行爲を監視す』と
再び砂の塵あげて
馬は一聲嘶きぬ
喇叭はまたも鳴り初めぬ。

火砲の響殷殷と
野より丘より林より
起れば今は埃及軍
葬のごとかげはなく

いまはと名のる佛軍の
萬歲の聲のとどろきぬ。

陣頭に立つ人や誰れ

落葉吹きまく晩秋の
オーステルリツヒの高原は
墓のあなたに入る如く
ただ灰色に見ゆるかな。

自ら馬に跨りて
高きに登り眺むれど

雲は夕の色を閉ぢ
陣雲くらし丘の上。

北斗は白くまた青く
さながら若き少女が
花ふりこぼす様に似て
かなたの空にきらめきぬ。

皷角は冴えぬ夜は深し
見よや彼方の澳露軍

旗をまきつつ丘越えて
疾風のごと進み來ぬ。

甲の星は空に照り
劍の光霜に冴ゆ
嵐は叫び風泣いて
阿鼻叫喚ぞわたり行く。

陣雲たかし夜は明けて
仰げばなびく旗の色

戎馬に鞭ちただひとり
陣頭に立つ人や誰れ。

いかづち落つると見るばかり
ふるひどよめき渦まきて
今はと名のる佛軍の
叫びにふるふ鷲の旗。

馬は斃れぬ旗の下
劍は折れぬ陣の前

銀甲ここにとび散りて
つひに破れぬ墺露軍。

オーステルリツヒの朝風よ
ブラツチエン丘の朝風よ
恨を吹けど佛軍の
萬歳となのる聲たかし。

ああ陣頭に君たちて
パリ滿城の春を戀ふ

今はしづかに高原に
蹄の音のひびくかな。

ウオーターローの夕まぐれ

灰色の雲野に落ちて
銀色に降る雨の音
魔神荒ぶか草青き
ウオーターローの高原は
古き伽藍に見いでつる
壁畫のさまにうすぐらし。

こなた間近き荒海は
赤き帆かげも見えずして
波と嵐のあらそひに
潮は煙り渦まきて
天地破るる時にしも
深手の痛みしのびつつ
聞く角笛の音のごと
空の遠までとどろきぬ。

ああ十萬の佛軍の

旗に亂るる雨の色
ここには獨り劍ついて
振りさけ見つつ援軍の
旗を今かと眺むれど
雲ひくくして見えわかず
ただその果も灰色よ。

屍は野邊に横はり
血汐は草の根に染みぬ
ただまぼろしよ銀甲も

劍も泥にまみれ果て
『友よと』叫ぶ聲もなく
馬前に砲もくだけぬる。

君は再び馬にして
斷頭台にのぼるごと
高きによりて見さぐれど
眼に入るものは敵軍の
白く亂れる劍のみ
焰亂れしそがなかに

恨は長し旗の色。

ああ蓋世の君なれど
殯の宮の葬列を
夕日の前に見るごとき
かなしきさまを眺めつつ
おぼろげならぬ一場の
己が墓をも思ひけむ——。

わが業終るいざさらば

ウオーターローよ今はとて
馬前に君はうなだれぬ。

わが來し方を見かへれば

わが來しかたを見かへれば
はるばるとほき海の上
あらしに吠ゆる夕浪は
今日のわかれを悲しげに
嘆くが如く身ぶるひて
空の遠までとどろきぬ。

巖にのぼりただひとり
故郷の方眺むれば
墓のごとくに暮れかかる
はてなき海に渦まきて
緋の花ぶさとかがやかに
沈み行く日は匂ふかな。

ああ破れ行く悲しみに
せめては遠き故郷の
音聞かばやと砂に伏し

ふりさけ見れど聲たかき
波にうたひて波に去る
海の小鳥の小唄のみ。

今は術なくただひとり
少女のごとくうなだれて
巴里滿城歡樂の
うら若き日を忍ぶれど
色褪めはてて古びたる
古き繪に似るまぼろしよ。

モスコーの丘の火の色も
ワーテルローの血の色も
見はてぬ夢と朽されて
のこるはとほきいにしへの
われを抱きし故郷の
母の腕の白き色。

セントヘレナの夕まぐれ
木乃尹の如く痩せ果てし

骸をよせて聲ほそく
『ゆるせ』と岩をかき抱き
ひとり悲しく灰色の
墓ある國を忍び見む。

芳水詩集

をはり

芳水詩集

著者　有本歡之助
　　京橋區南紺屋町十二番地

發行者　增田義一
　　京橋區南紺屋町十二番地

印刷者　石川金太郎
　　京橋區西紺屋町二十七番地

印刷所　秀英舍
　　京橋區西紺屋町二十七番地
　　電話　八七四　八七五　八七六　九八九

發行所　實業之日本社

大正三年三月貳拾日印刷
大正三年三月廿五日發行

不許複製

定價四十錢